

展勝地風土記

Vol.6

平成25年10月25日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は平成26年1月24日に発行します。

もう一つの展勝地

みちのく民俗村名誉村民 郡司 直衛

縄文の祈り

ここに立っているこの石はいったい何だろう。

ー縄文中期といえば今から5000年の昔ー

彼ら縄文人の住んでいた樺山の、その西向きの斜面に立っている…

この石はいったい何だろう。

丘の向こうには、北上川をへだてて南から北に、夏油の山々が並んでいる。

経塚山をはじめとする海拔1000メートルを超す七座の山々。

その北の端に立っているのが前塚見山。

こんなにきれいな山々が、ぞろつと並んで見える場所を、せつかく選んで立てたからには、きっとその山のどれかに向けて、この石は立てられたのにちがいない。

雪が消えて春が来ると、南に去った太陽はまた夏油の山に戻って来る。そして春分の日が近づくとある

日、太陽は前塚見山の双頭のくぼみに落ちていく。

ギラギラ燃えて落ちていく。

そのとき樺山に堅く積った雪が沈み、同心円のシマ模様の中から、立石がその姿を見せるのだ。

これから春になるという日に、部落の長は人々を従えてこの日、この石の前に集まり、今年も森に実が稔り、山にけものが満ち、川に魚が溢れるようにと、太陽の沈む山に祈ったのだ。

そうだ!!北上川には鮭が、和賀川にはアユが、夏油川にはイワナが満ちあふれるようにと祈ったにちがいない。じっさいこの間まで夏油の山の奥の沼では、手づかみで吠一ぱいのイワナがとれたのだから。

そして、その沼の向こうの山は鷲ヶ森で、鷲がいっぱい棲んでいて、エサになる獲物もいっぱい、そのとなりの兎森にはうさぎがいっぱい棲んでいて……

だから樺山の村長は、彼の胸に



樺山の丘から見る前塚見山

ビッシリと書きこまれたカレンダー、何百の草や木の名、何十の鳥やけものの中から、明日とりに行くものの名をあげて、神々に許しを乞い、その獲ものの中の一番立派な奴を、貴方(神)に捧げることをこの石の前で誓ったのだ。

ぞろつと並んで立っている夏油の山々はみな神さまで、そのうち人里

の近くに居て人の願いをよく聞くことの出来る神さまが、前塚見山だった。人間のそばに居て奥津神や遠津神々にその願いを伝えて呉れていたのだ。

この前塚見山は地図で見ると独立峰なのに、樺山から見ると双頭の山に見える。それはうしろに並ぶオガラ森が重なってそう見えるのだ。

ところで太陽が双頭の峰の間に落ちていくということは、古代ではたいへん重要な意味を持っていたという。大和の二上山も、関東の筑波山も、新潟の弥彦山もみな双頭の山で、二神並び立つ山として尊ばれ、そこに太陽が沈むということは、天と地との婚姻のシンボルであった。

だから、その現象が見られる場所はまた神聖なる場所であった。こうして山と太陽を結ぶ線が樺山を通り、そこにストーンサークルが築かれた。

太陽が沈むと天は一段とその紅を増し、太陽を孕んだ山は透明な紫水晶となって燃えつづける。一日の終りを見送り、よみがえりの朝を迎えるこの丘は、また一年の季節のめぐり、いのちの甦りを迎える「春の祭りの場」でもあった。

縄文の人々はその壮大な転生のドラマを見ることのできる丘「樺山」に石を立て、祈りの聖地としたのちがいない。

平成3年刊「縄文の祈り」所収

※郡司直衛 1919年(大正8)、黒沢尻町(現・北上市)に生まれる。北上山岳会創立会員・(社)東北地域環境計画研究会会員。著書に「夏油の四季」「国見山散歩」のほか随筆集『夏油の森の物語』『川は死んだ』などあり。

獅子ヶ鼻 (1,293.6m)	焼石岳 経塚のうしろ で見えない (1,548m)	経塚山 (1,372.6m)	駒ヶ岳 (1,129.8m)	牛形山 (1,339.8m)	白っこ森 (1,229m)	鷲ヶ森 (1,207.4m)	丸子峠	うさぎ森 (1,054m)	オガラ森 (915m)	前塚見山 (914.8m)
--------------------	------------------------------------	-------------------	-------------------	-------------------	------------------	-------------------	-----	------------------	----------------	------------------



「もう一つの展勝地」

さくらの展勝地はもとよりのこと、桜がなかったころの畳山や草刈山の片鱗を、どこかの隅にでも残しておきたいな！というのが私の願いです。

畳山というのは陣ヶ丘のことで、草刈山は畳山の登り口(民俗村の入り口)からカニとりをした沢の向こう側一帯の山をそう呼んでいました。春にはそこはサランコバナコの畑でした。足の踏み場もないほどに咲き乱れていました。そして、そこにはノビル・カンゾウ・ヨモギ・スイバ・ノノバ・フキなどが生い茂っていました。そして、水辺にはサクラソウが咲き、ネコノメソウが咲き、田セリやミツバが繁っていました。雑木林にはキマンサクが黄に咲き、ミツバウツギが白く咲き、やがてタラボウがふくらんで来しました。

手拭いで頬かむりをして竹カゴを下げて草を摘む母の姿が浮かんできます。“春の野に出て若菜摘む”というコトバが自然に湧き上がってくるのです。

お花見やイベントから離れたこんな展勝地があってもいいのかなと私は思います。百年まではとても生きては居られませんので、一言書きとめておきます

平成24年5月

サランコバナコ||アマズマイチゲ
ザンギリコ||オキナグサ
ノノバ||ツリガネニンジン
キマンサク||アブラチャン

「春の野に出て若菜摘む…」

足元にはサランコバナコが群れて咲く



展勝地(昭和30年)

